

## 青少年アンビシャス運動シンポジウム講演録

### 「中生日記(NHK番組)の現場から」

脚本家・作詞家 蓬萊 泰三

平成15年2月16日

福岡県中小企業振興センター（福岡市博多区）

1つお断りがございます。今から何やらまともな顔をして、子どもの教育というものについてお話をさせていただくのですが、実は私には子どもがいません。だから子育てをやっておりません。子育てもしていない男が子育てについて話をするなどというのは大変後ろめたいのですが、ただ、『中生日記』という番組で足掛け約30年、実質的には24年くらいですが、中学生・高校生達と向き合ってきました。彼らが抱えている問題やら不満、その他もろもろを直に聞いてきたわけです。今日は大変おこがましいのですが、彼らの代弁をするというような形で話をさせていただければと思っております。

まず、『中生日記』という番組について、ちょっとお話をしたいのですが、「あそこに出ている子どもはどういう子どもですか」とよく聞かれます。

実はほとんどの子どもが、素人の普通の中高生です。10パーセントくらいは子役が入っておりますが、皮肉なことに、どちらかと言いますと子役の子ども達より、初めてドラマをやる普通の中高生の子ども達の方が私にとっては大変ありがたい、好ましい演技をしてくれます。なぜならば、大人が変な芝居を教え込んでいないからです。彼らは自分の日常をドラマの中で追体験する形でぶつけてくる。それがじつに迫力があって、そのお陰で何十年もあの番組が続いているのだらうと思います。

そういう一般募集の子ども達なものですから、いろんな子どもがおります。優等生もいればガリ勉もいれば、スケバンもいれば、番長のようなものもいれば、いじめっ子もいじめられっ子も、そして何年か前からは不登校生もかなりふえてきております。

あの番組が他のドラマと趣を異にしているのは、まず出ている子どもがそういう素人の普通の中高生だということ。それともう1つは、取材ドラマだということです。

何よりも子ども達に取材しまして、それから本を書き始めます。必要とあれば教育委員会、学校の先生方、保護者の皆さんなどにも取材をいたしまして台本を作ります。取材範囲は、おおげさにいうと日本全国、北海道から沖縄までに及んでいます。だけど、お金の関係もありまして、主として名古屋周辺で取材をしております。

そういう子ども達を見ていまして、最近大変気になる点が2つあります。その1つは、この頃の子供達はやたらと結果だけにこだわる生き方を身につけてしまった。もっと言えば、自分が欲する結果を得るためには手段を選ばないような生き方を身につけてしまったということです。

例えば成績との関係において言えば、カンニングなどというのは日常茶飯事でありまして、答案を返却してもらって、すぐ横を見て、正解をそこでパパッと書き直して、職員室に先生がお帰りになるのを追いかけて行って、「先生、採点ミスです」ということはしょっちゅうやっているみたいですね。

私が今話をしておりますのは、主として名古屋周辺あるいは東京の中高生でありまして、福岡県の中高生はそんなことは無いのかもわかりません。そういう意味で幾分ズレがあるかも知れませんが、お許しいただきたい。

成績との関係で言えば、ほかには、これは全国的に割合あるようですが、テスト前に自分のライバルのノートを捨てちゃうんですね。かつては焼却炉で燃やす生徒がいたんですが、この頃、焼却炉がなくなったものですから、ドブ川に捨てたりするようです。

そうかと思うと、万引きというのがありますね。これは本当に日常的に彼らはやっている。あるCD屋の店長さんが言うには、「この頃は本当に奴らは可愛げがない。昔は万引きを見つけたら、泣いて謝っていた」と。ところがこの頃は、万引きしたのを見つけてお説教しても、スーッと返して、「返したからいいでしょう」と言ってさっさと帰ってしまったというんですね。

そういうふうには、とにかくCDが欲しいとなると手段を選ばないで盗むと。結果が1つ手に入った。それが見つかった。それを返せば、これは返したという結果で、それでいいと。その間のことは一切抜けているわけですね。そういう子ども達が増えた。

しかし、変なのは子どもだけかと言いますと、どっこいそうではありませんで、申し上げにくいのですが、結構、手段を選ばないような先生もいらっしゃる。例えば体罰教師ですね。未だに体罰教師が名古屋周辺では盛んに活動していらっしゃる。それから変わり種としては、職員室を出るときにカメラをぶら下げて出る先生がいらっしゃるんですね。その先生は、「俺はカメラマニアなんだ」とおっしゃっているそうですが、子ども達はみんなわかっていて、「あれは証拠写真を撮るぞと俺達を脅かしているんだ」と言っている。

そうかと思うと、これもひどい体罰の例ですが、生徒が言うことを聞かないので殴った。しかも殴り倒した。普通だったらそこまでなんですが、さらにその倒れた生徒の顔を蹴るというような教師まで出てきた。これは名古屋周辺で1件、それから関東周辺で同じような事例がもう1件あります。先生もそういう、手段を選ばないような先生が出てきた。

では、親の皆さんはどうかと言いますと、私の知り合いの家庭教師の大学生に聞いた話ですが、派遣会社からある家に行った。一人息子と会って、じゃあ今から君の部屋に行って勉強しようかと言ったら、そのお母さんが、「ちょっと待ってください」と出ていかれた。しばらく待っていると、いきなり横っちょからぬつと目の前に何かを突き出された。見ると、布団叩きだったんですね。びっくりして、「何ですか、これは」と言ったら、お母さんが「うちの子は怠けもんです。だから怠けたら、これでひっぱたいてください」と。

さすがにその大学生が、「私はおたくのお子さんを殴るために来たんじゃない。だから僕はこんなもので殴れません」と言ったら、そのお母さんいわく、「いえ、これは愛の鞭

です。塾では竹刀です。」一嘘みたいな本当の話です。

そうかと思うと、これは北関東のある町で起きた悲惨な事件なんです、これまたお母さんの話です。どうしてもお母さんの話が多くなって大変申し訳ないのですが、お母さんの話です。

大変な教育ママさんで、自分の子をどうしても超一流の国立大学、つまり東大に入れた。そのためには県内の進学塾ではダメだと。それで東京の進学塾に通うようになった。往復4時間です。

そのうち、その子が疲れてきた。さすがにお父さんが、もういい加減にしろと。当然、夫婦喧嘩がおきました。

するとお母さんは、これは往復4時間もかけているから悪いのだ、東京に住めばいいのだと。そこで強引に東京へ転校させました。同時に、お母さんも一緒に転居してしまった。お父さんを一人放ったらかしにして。

お父さんはずいぶん我慢なさったらしいのですが、子どもはますます元気がなくなってくる。またもお父さんがお母さんに文句をおっしゃったらしい。「お前のやり方は間違ってる」と。

そうするとお母さんは、「あなたはあの子を愛してない。私はあの子にどこまでもついて行きます。別れましょう」。お父さんが何とおっしゃっても、お母さんはおききにならなかった。

結局、別れることになりまして、お父さんは大きな家に一人で住んでいたのですが、その家へ、お母さんが離婚の書類にハンコを押すために、ある日東京から帰っていらした。戸が閉まっていた。そしてお母さんが中に入ってみると、お父さんは自分で命を絶っておられた。

お母さんは、あるいは自分の子どものためにと思っただけ一生懸命におやりになったのかもしれないけれども、結果的には子どもにとってたった一人の、大事な父親を殺してしまった。自分のやり方で。そういうひとりよがりな手段を選ばないようなお母さんもいます。

今お話しした先生にしてもお母さんたちにしても、これはかなり特殊な極端な例かもしれませんが、ただ考えてみますと、この間までの高度経済成長の時代に、いっぱい物が豊かになった中で、私たち大人は、なるべく手っとり早く結果を手に入れたがる習性を身につけてしまった。そういう私たち大人が作り上げた教育の仕組みの中で、子ども達は成績という結果だけを要求され、その成績という結果だけで手っ取り早く評価されるようなことになってしまった。そういうことをされている子ども達が、手っ取り早い結果だけにこだわる生き方を身につけたとしても、これは当然だろうという気がいたします。

もう1つ気になる点があります。それは今の子ども達が、学校で勉強することにも、さらに言えば、生きることに意欲を失ってしまっているように思えることです。もっと端的に言えば、自分で自分の将来を見限ってしまっている、そういう子どもがやたらと増えてきたような気がいたします。

番組の取材で時折、これは愚問だろうと思いつつ聞くんですけれども、「将来の夢があったら聞かせてほしい」と。そうするとほとんどの子が、「そんなことを考えたって無駄だ」と言うんです。

たまに女の子が、例えばスチュワーデスになりたいとかアニメーションの世界で仕事がしたいとか言うんです。言うんですが、すぐに付け加える言葉が、「でもダメだよ」です。自分でこうありたいと思いつつながらも、すぐに「でもダメだ」と。

じゃあ、そういうふうに見限ってしまった彼らにとって何が生き甲斐なのかというと、今日しかないんですね。今日さえ良ければそれでいいと。結果的には、ものすごく刹那的な生き方になります。その刹那的な生き方を支えているのがお金です。

よく保護者の方が、「うちの子を含めて、この頃の子どもはどうしてあんなにお金、お金と言うんだろう」とおっしゃるんですが、要するに彼らは刹那的に今日を楽しく生きるために、さしあたってはお金が必要。

ですから彼らなりに実に頭を働かせて、いろんな金儲けをやります。例えば、宿題の請負をやったり、それから、ずばり金貸しをやっている子どももいます。これは銀行マンが聞いたらひっくり返るような高利です。結局、その利子が払えなくて不登校になった女の子までいます。

そうかと思うと、自営業の親の金を10ヶ月にわたって200万円盗んでしまった女の子がいた。それを友達と5人で、この辺が面白いのですが、等分に分けたんですね。月4万円ですね。

月4万円の小遣いというのは、並のサラリーマンが奥さんに許されている小遣いくらいじゃないでしょうか。それを彼女ら、彼らが何に使ったかと言いますと、ゲーセン、いわゆるゲームセンターですね。それとハンバーガーショップ。他に何かに使ったかと聞きまわしたから、「Tシャツを2~3枚買ったかな」と、その程度です。それがついに親にばれてしまって、親が学校にねじ込んで、貰った方の子どもの親はそれを弁償させられたらしいのですが、そういうことがある。

同じようなことは、これまた関東周辺で、こちらは250万円で男の子。しかし、もっとひどい事件が起きています。ひょっとしたらご記憶に残ってるかもしれませんが、今から3年くらい前ですが、お父さんが亡くなって母1人子1人になった中学生から、13人くらいでよってたかって、総計5000万円を恐喝した事件が名古屋でありました。これは結局、なぜそこまでいったかということ。警察の対応も学校の対応もあまり十分でなくて、放置するような結果になってしまって、大変なことになったんですけれども。

問題なのは、その13人の子どもの中で、いわゆるワルは2、3人です。あとの10人はほとんど普通の子です。しかも、中には成績がかなりいい子も、PTAの会長の息子さんまで入っていた。今日さえ楽しければということ、そこまでいってしまう。

なぜ、こういう結果だけにとらわれたり、将来について自分を見限ったり、こういうことに中学生たち、あるいは高校生たちがなってしまったのかということなんですけれども、大

変乱暴な言い方になりますが、やはり僕は中学校が高校進学のための選別場になってしまったからではないかと思っています。

しかも、どういう物差しで選別しているかという、結局は成績という物差しだけで生徒を選別しているわけですね。ついこの間まで、それを相対評価と称してランク分けしていたわけです。

だから自分では、「今度は俺は頑張ったから 3 から 4 になるかな」と思っても、パーセンテージですから、少くも頑張ったって 3 は 3 なんですね。だんだん、だんだん、やる気がなくなる。そうなってくると、「おれは、わたしは、この程度の人間なんだから今日さえ楽しければいいや」と、そうなってくるわけです。

そういう成績偏重ではまずいというので、途中から、内申重視になりましたね。

実を言いますと、内申重視になって、これは良かったなと私は思いました。これで、どちらかと言えば頭の良くない子も救われると。

ところが結果的には裏目に出ましたね。子ども達に聞きますと、朝から晩まで見張られるようになったと。昼の時間に校庭に遊びに出ても、まず周りを見回してから遊ぶようになった。先公がいるかいないかを見てから遊ぶ、そういうことになった。彼ら、彼女たちは大変息苦しい状態になって、大げさに言うと、全人格をチェックされるようなことになった。居場所がなくなり、友達同士の不信感が生まれてくる。「受験のことを考えると周りはみんな敵なんだ」と、そういうことを言う子が大変増えてきた。

そういう息苦しい状況の中でいじめが起きてきたわけですがけれども、いじめに関して言いますと、今のいじめというのはものすごく陰湿な感じで、表面に出ないんですね。だから学校の先生が見落とされるのは無理もないかなという気がするくらい陰湿な感じになっている。

なおかつ、いじめる子といじめられる子が錯綜しているんですね。だからいじめのテーマで取材するときに、「いじめに遭った子は手を挙げて」と言ったら、全員、ハイと手を挙げるんですね。「じゃあ、いじめた経験があるもの」と言うと、ほとんどがまたハイと手を挙げるんです。

話を聞きますと、昔みたいに今のいじめは理由なんか要らないのだと。昔はそれなりに理由があった。ところが今では、グループを仕切っている生徒が、「あいつ、鬱陶しいな」と言って、周りがそうだそうだと同意すると、そのあいつはそのとき以降、いじめにあうんですね。だから彼ら、彼女たちは「標的になる」という言い方をします。

では標的から逃れるのにはどうするのだと聞きますと、耐えるしかない、標的が自分から他の子に移るのを待つしかないのだと。そのために、仕切っているボスみたいなやつにチクってみたりいろいろやるんだそうですが、ただ、ひたすら待つ。しかし待つことに耐えられなくなって、時折、自死するというような不幸なことにもなるのです。

ところが彼らは、話を聞いていますと、何かゲーム感覚的なんですね。行われていることは実に残酷で非人間的なことなんですが、自分がいじめたり、いじめられたりしている

ものですから、あまり良心の呵責のようなものも、相手の痛みもそう感じていない。

そういう状況の中で、いじめられている子どもに話を聞きますと、みんな、「親に言うのが恥ずかしい」と言うんです。「なぜ親に言うのが恥ずかしいのか」と聞きますと、「ダメな子だと思われたくないから」と言うんです。「なぜ、いじめられているということをお父さんお母さんに言うとダメな子だと思われるんだ」と聞きますと、そういう子どもたちのお父さんお母さんは、だいたい次のようにおっしゃっています。

お父さんは、「いじめられている子には近づくな」と必ず言っています。お母さんは、「いじめに遭っちゃイヤよ」と。「イヤよ」なんです。これは自分たちがいじめという渦の中に巻き込まれるのを嫌がっているだけの発言で、子どものことを考えている発言ではありません。中学1年、2年にもなれば、せこい親の考えなんていうのはビンビン子どもにはわかります。そんな親に、自分がいじめられていることを子どもが告白するはずがない。

いじめのもう一方で問題になっているのが、不登校であります。この不登校、さっきもちょっと申しましたが、『中学生日記』にもずいぶん来ています。今から2年半くらい前の時点で、『中学生日記』では7人に1人が不登校の経験、あるいは現役の不登校生でした。それくらい増えている。今は、おそらくもっと多いのかもしれませんが。

いろんな不登校生がいるわけですね。例えば、ギンギラギンの茶髪の、見るからにスケバンの女の子がある日突然、不登校になった。なんでかと思って、わけを聞いたら、その子いわく、「学校に行くのが怖いのだ」と。

何で怖いのかと聞きましたら、「行くと必ずいじめをやっちゃうから」と言うんですね。僕はちょっと出来過ぎていると思いました。格好つけてると思ったんですね。それでさらに話を聞こうと思ったら、帰っちゃったんです。

しばらく経ってからディレクターのところに電話があって、今から行くと。それで1冊のノートを持ってきて置いて帰ったらいいんです。そのノートを読みました。そしたら、ノートの罫線に関係なく、小さな字でぎっしりといじめられた毎日の記録が書いてあるんです。彼女は1年生のときにはいじめられていたんですね。今の姿になったのは、2年になって、後で彼女に聞いたのですが、「いじめられるよりはいじめる方に回った方がマシだと思ったから」だそうです。

そして、みるみる彼女はスケバンとしてのしていったんですね。そして今度はいじめる側になった。ところが学校でも指折りのスケバンになって、いじめをやっているある日、彼女はふとしたことで押入れにぶちこんでいた1年の時のノートを発見したんです。それで読み返してみた。それ以後、学校に行けなくなったと言うんです。

僕はそのノートを読んでいったのですが、2学期の終わりくらいあたりで、そこから後は白紙なんです。切れているんです。おかしいなと思って最後まで調べましたら、一番最後のページに、今度は割合大きな字で走り書きがしてありました。「お父さん、お母さん、ごめんなさい。もうダメ。ありがとう、さようなら」、要するに遺書です。

そのノートを見て、もう1回彼女に、「もし喋れるなら、話を聞かせてくれないか」と

いったら、彼女が来てくれました。そして涙ぐみながら彼女が言ったのは、「この自分の1年の時のノート見て、はっとした。今、私がいじめているあの子ども、ひょっとしたら遺書を書いているかもしれない。そう思うとこわくて学校に行けなくなった」。

その子は、私たちの勧めで、いじめている子と文通するようになって何とか学校に行けるようになったのですが、それでも4ヶ月くらい経って、やっと行けたんですね。そういう子がいます。

そうかと思うと、小学校の先生の息子さんで、ものすごくまじめな子で、成績も良くてクラスの人気者だった子が不登校になった。お母さんは、なぜ不登校になったのかわからない。ところが、知り合いの養護の先生が、「こんなことをあなたの息子さんに聞いたことがある」と知らせてくださった。

その養護の先生が、「A男くん、頑張っているわね」と言ったら、「おふくろが先生だもん」と言ったと言うんですね。それで養護の先生がお母さんに言われた。「ひょっとしたら先生の子だからと思って頑張り過ぎて、自分に完璧を求めすぎて、今のような状態になったんじゃないか」と。それを聞いてお母さんは愕然となさったんですね。

その夜、彼の閉じこもっている部屋へ行って、お母さんは謝られたそうです。「私は考えてみると、うちへ帰ってきてあなたに対してまで先生をやっていた。だからもう、無理しなくてもいい。A男くんはA男くんのままでいい。A男くんがそのままいてくれるだけでいい」と、泣きながらおっしゃったそうです。

だいたい不登校生というのは、まず机の周りの学校の匂いのするものを全部押入れかなんかに放り込むんです。教科書から問題集からノートから、鉛筆からボールペンから。そして次に自分の制服などをハサミで切ったり、ナイフで切って、これまた押入れに放り込む。要するに、自分の部屋から学校の匂いがするものを全部なくす。そして、夏ならタオルケット、冬なら毛布を頭からかぶったりします。そして朝から晩まで、窓も開けず、カーテンも開けず、一日中薄暗い部屋の隅で、うずくまっているんです。そういうA男くんにお母さんがあやまられた。

それから2~3日経って、お母さんが小学校から持って帰られた仕事を居間でなさっていると、ふとA男くんが居間に入ってきた。そしてボーッと立っている。「どうしたの」とお母さんがきいたら、A男くんが何かぼそぼそと言ったらしいのですが、聞こえない。もう一度、お母さんが「なあに」ときいたら、A男くんは小さな声で「だっこ」と言いました。

これは抱っこしてほしいということだとお母さんはびっくりしましたがA男くんを、ソファの隣に座らせ、それから彼を、抱きよせてじっとなさいっていたそうです。彼は、お母さんの肩にあごを乗せるような形で、二人とも何も言わないで、じっと抱き合っていた。

そしてかなり経ったとき、A男くんがふっと体を離したというんですね。お母さんが「どうしたの」という感じで顔を見ると、「もういい」と言ったのだそうです。そして彼は立ち上がって何歩か後ずさりして、しばらく立っていたのですが、顔を上げるとお母さんを見つめて、「ありがとう」と言って出ていったというんです。

あくる朝、なにやら音がするので、心配になって、お母さんがA男くんの部屋を覗いてみると、カーテンが開けられ、窓が開けられ、差し込む朝日に向かって彼が深呼吸をしていたというんです。

彼はお母さんに抱っこしてもらうことで、不登校のピンチを、脱するきっかけを得たわけです。カウンセラーの人たちに聞きますと、不登校生というのは、幼児化する場合があります。なぜ幼児化するのか。不登校生たちは学校に行きたくない子ども達ではないんですね。行きたいけれども行けない子ども達です。なぜ行けなくなったかという、それはいつの間にか本当の自分がいなくなった、そのことに気付くわけです。ある時、突然に。「ここにいる俺は俺じゃない」と。

そうすると、今度は校門の手前まで行くとお腹が痛くなったり、吐き気がしたりして行けなくなってしまう。そして毛布をかぶりながら、一生懸命に自分探しをやっているんです。そういう自分探しをやっている子どもにとって、一番すがりつきたいのが母親の愛なんですね。あるいは、かつて愛された記憶にすがりつきたい。そこにすがりつくことによって、本当の自分をもう1度、見つけたい。そして、今も愛されているかということを確認したい。そのことによって、いなくなった自分を何とかして捜し出そうとしている。その結果、幼児化することがあるようなんです。

いじめといい、不登校といい、日本の子どもたちがなぜこんなことになったのか。最初に戻るようになりますが、結局は、私たち大人が子ども達に結果だけを求めすぎて、彼らの人間関係をずたずたにして、彼ら一人一人を孤立させてしまったからです。

結局、成績についてもそこへたどり着くまでの子ども達のプロセスを我々大人は見守ってやることをしなかったのではないか。あまりにも結果だけを重視していたために、彼らもプロセスを無視して手段を選ばないような生き方を身につけたのではないか。

これは言うまでもないことですが、私たちの考え方の中からプロセスというものが消えていくと、私たちの周りには他者、それは人間も自然もですが、その他者に対する感受性が段々消えていきます。

他者が消えるとどうなるか。結局は自分が見えなくなってくる。なぜか。これは言わずもがなのことですけれども、私たちは他者と触れあったり向き合うことで、自分というものを確認する。あるいは今まで気付かなかった自分を発見する。言ってみれば、他者というものは我々の鏡なんです。

ところが、結果だけを追い求めてプロセスを無視すると、その他者に対する感受性消えてしまう。そのために全員が孤立し、いじめや不登校が起きる。

このプロセスというのは一見、大変無駄な時間です。しかし、子どもが育つのは、一見無駄なその時間の中での試行錯誤によってです。あっちに行っておでこをぶついたり、こっちに行っておひっくり返ったり、そういう試行錯誤を繰り返しながら、自分を見つめたり、自分に納得したりしながら育っていくのが子どもだろうと思うんです。ですから、この試行錯誤をする一見無駄なプロセス、一見無駄な時間というのは、一番子どもにとって重要



な時間のはずなんです、どうも私たち大人はそれは不必要だというので切ってしまう。そして暇さえあれば追い立てる。

そういう意味でアンビシャス運動というのは、長い間、子どもとかかわってきた私には大変嬉しい、有り難い運動なんです。

こんな話があります。女の子の話です。C子さんということにしましょう。このCさんは大変成績が良くて、ガリ勉です。ところがある時、お母さんから老人ホームへボランティアへ行きなさいと言われたんですね。日曜日ごとに。その老人ホームというのは、お母さんの知り合いが関係なさっているところらしくて、全部、お母さんが段取りを決めて、お母さんの指示で行けと言われた。

ところが彼女にすれば、そのときはすでに3年生になっていたんですか、一刻を惜しんで受験勉強をしたかった。日曜日というのは、例えば周りのライバルと一番差を付けられる日なんです。その日曜日を、「そんなわけのわからない老人ホームに行ってムダにするなんてとんでもない」と彼女は思ったんですね。だからお母さんに嫌だと言ったけれども、お母さんいわく、「内申点が上がるよ」と。

それで彼女は嫌々ながら、内申点稼ぎで行きました。そのときにお母さんが、お花を買って行きなさいと言って、何千円かくれたんです。小さな花束くらい買えるお金でしょう。ところが、ちょうどその頃、母の日の後だったらしくて、花屋さんに行きますと売れ残りのカーネーションを安く売っていたらしいです。しかも、彼女はけちって、たった1本だけカーネーションを買って、あとのお金は全部ポケットに入れて、これは悪くないという感じで老人ホームへ行った。

紹介されたのは70歳半ばを過ぎた足が悪いというおばあさんで、部屋にはものすごく立派な花瓶が置いてありました。花をさし出すと、おばあさんが一言、「ありがとう」とは言っただけなのですが、その後は口もきかない。しかたなく彼女が花瓶に水を入れて、たった1本のカーネーションを入れると、ふいにおばあさんが「いくら」と言った。一瞬、何のことかわからなかったけれども、まもなく花の値段だと気づいた。とたんに彼女はまるで心の中を見透かされたような感じがして、ものが言えなくなってしまった。それでも無理して、「何かしてあげましょうか」とか何とか言っても、おばあさんは無言で首を振るだけ。

結局、彼女は居たたまれなくて、その日は、逃げて帰ってきちゃった。「20分いたかなあ」と言うんですね。それで帰ってきて、お母さんに、もう二度と嫌だと。

ところが、月曜日に学校に行きましたら、その老人ホームからすでにちゃんと「何組のCさんがボランティアで来てくれました。よろしくお伝えください」という連絡が入っていたんですね。担任の先生にも誉められた。「じゃあ、少しは内申点が良くなるかも」。そこで次の週もまた行きました。

行ってみたら、花瓶の横に、1万円はしそうな、ものすごく立派な花束が置いてあった。彼女が持っていったのはその日も1本だけです。しかも、その立派な花瓶には、前の週に

彼女が持ってきたカーネーションが1本、萎れはてているのにまださしてある。その下にゴージャスな花束がある。彼女はすっかりみじめではずかしくなった。するとおばあさんが、「それ持ってって」と言った。「は？」と聞いたら、「その花束を事務所に持って行って」と。

わけがわからないまま彼女がその花束を事務室に持って行きますと、事務の女の方は、「この花、ご自分の部屋で飾ればいいのにね。せっかく毎日お嫁さんが持っていらっしゃるのに」と。そしてさらに「だけど、おばあちゃんはこの花より、あなたの花の方が好きなようよ。枯れても捨てないでおっしゃるの」。彼女は何となく変な気分になって帰ってきて、萎れた花と持ってきた1本を入れ替えたそうです。

おばあさんが自分の花の方が好きだと思ってくれていることがわかったものですから、少し話ができるかと思ってC子さんが声を掛けるんだけど、やはりダメなんですね。結局その日も30分経つか経たないくらいで、今度はおばあさんが「帰ってくれていいよ」と言ったというんです。彼女は憤然として帰ってきました。

しかし、やはり内申稼ぎの点でお母さんにまた説得されて、次の週も行ったそうです。その時には花を3本買っていたそうです。なんだかプライドが許さなかった。そしたらおばあさんが見るなり、「1本でいいのに」と言ったというんです。また、かちんときた。可愛げがない。何か気持ちを見透かされているような気がした。

それでC子さんがむっとしてしていると、おばあさんが突然、「友達はあるの」と聞いたらしいんです。彼女は当然、「いるわよ」と言った。「どんな友達」とおばあさんがしつこく聞く。それで彼女は自分のクラスメートの噂話をいろいろ始めたわけです。

ところが実を言うと、彼女は誰も友達がいない子だったんですね。クラスで常に1番か2番。ですから自分のライバルは敵だと思っていて、他のクラスメートのことはバカだと思っている。だから誰も彼女に近づいても来ないし、彼女も友達を欲しいとも思っていない。頭の中にあるのは高校進学だけ。

そんなクラスメートの話をしていると、当然ですが、だんだん悪口になってきたんですね。そしてとうとう話がストップしちゃった。話せなくなった。そうするとおばあさんが、「いいわね、友達がいっぱいいて」と言った。大変皮肉に聞こえた。

おばあさんが今度は、庭へ出たいと言い出した。足が悪いということなので、C子さんがサポートしようとする、その手を払って、ひよいひよいと自分ひとりで車椅子に乗ってしまった。庭へ出ると、ちょうど新緑が美しい頃で、2人で周りの木を見ていたのですが、おばあさんがぼつんと言ったそうです。「お友達は大事にした方がいいよ。でないと、私みたいになっちゃう」。その言葉もさっきの嘘を全部見透かした上での発言のようにC子さんは聞こえたのですが、しかしなぜかもうそんなに反発する気にならなかった。

しばらく庭で時間を過ごして、また部屋へ帰りました。部屋へ帰ってベッドに上がるときに、ふいにおばあさんが「おぶって」と言ったらしいんです。さっき乗るときには、自分でひよいひよいと乗ったんです。だから当然、ベッドに帰るときも自分でできるはず。

ところがわざわざ「おぶって」と言ったらいいんです。

C子さんは、言われたから仕方なしに背中を向けておばあさんをおぶった。おぶった途端にハッとした。あまりの軽さ、こんなにおばあさんというのが軽いものとは思わなかったというんですね。びっくりするほど軽いのに気が付いて、C子さんはそのときにふと、自分がおばあさんについて嘘を全部告白しようと思ったというんです。つまり、ここへ来ているのも内申点稼ぎであること。花は一番安いのをけちって、お母さんにはもっとお金をもらっていること。それに友達は何もない。だから今までおばあちゃんをずっと騙し続けていたんだということを告白したかった。ところが、どうしても言えなかったんですね。

そういうことがあって、ベッドに戻ったおばあさんが、彼女を見つめて言ったそうです。「本当にありがとう。だけど、お花は1本でいいからね」。彼女は胸がいっぱいになりながら、「じゃあ今度はケーキを買ってくるから一緒に食べよう」、そう言うと、おばあさんは突然顔をくちやくちやくにして、涙ぐみながら彼女の手を握りしめたらしいのですが、そのときにC子さんは思ったそうです。「来週、ケーキを2人で食べながら、そのときに今までの自分の嘘を告白しよう」と。

ところが、それから4~5日して老人ホームから電話が入りました。おばあさんが急に心臓発作で亡くなったと。彼女はすっ飛んで行きました。もうおばあさんは遺族の方が引き取られた後でした。ところが事務の女の方から、これをおばあちゃんから預かっていると封筒を渡されました。その老人ホームの封筒には、「C子ちゃん、ありがとう」と書かれていて、中にお金が入っていた。それは彼女が使ったお金よりもずっと多額のお金が入っていました。

彼女はびっくりしまして、おばあちゃんの気持ちだけでいいから、これを遺族の方にお返ししたいと言いましたら、事務の方が「いただいておきなさい。そして、おばあちゃんのことを思い出してあげなさい」とおっしゃった。

そういうことで、C子に言わせると「今はそのおばあちゃんから貰った封筒に入ったお金は、私のお守りみたいになっている。私の心が自己チューになったり、心が狭くなったときに、机の奥から取り出して見るのだ」と。

そしてさらに、「いつか、このお金は私より不幸な誰かのために使おうと思う」。C子さんは独り言のようにそういいました。

こういう、動機としては内申点稼ぎの大変よろしくない動機で始まった話なんですが、けれども彼女からみれば、まったく受験との関係においては無駄でしかない時間の中で、図らずもせこい内申点稼ぎをやったために、おばあさんと出会うことができた。彼女自身もおばあさんと出逢うことで自分の心の狭さに気が付きました。おばあさんも、おそらくお嫁さんとうまくいっていなかったんでしょう。息子さんともうまくいってなかったのかもわからない。そういう大変孤独なおばあさんだったんだけど、C子さんと出逢うことで心が触れあって、ひょっとしたらおばあさんは、亡くなるときにはC子さんを思い

出しながら、少しは幸せな気持ちで亡くなったかもわからない。

日本の子どもがなぜ、言葉はよくありませんが、いびつな状態になったか。それはおそらく我々大人が、彼らに無駄な時間を与えてやらなかった、無駄な時間を過ごすことを許してやらなかったからです。

「うちの子はグズ」と言うお母さんがいっぱいいらっしゃる。お話を聞くと、「わけもなしに空なんかを見ているんです。ぼーっと」と言うんですね。「いいじゃないですか。そのときにお宅のお子さんがボーッと空を見ながら何を考えているかわかりますか」と言ったら、わかりませんと。

ひょっとすると、とんでもなくすごいことことを考えているかもわかりません。事実、ボーッとしているということは、何かを考えているんですね。少なくとも、あくせくして走り回っているときよりは、何かを見つめているものです。だからそういう時間こそが子どもにとっては、自分と向き合う大変重要な時間なのだろうと思います。

それと、我々大人が一番反省しなければいけないのは、ものすごくせっかちなことですね。まず第一に、子どもと対した時に、自分が子どもであったことを忘れてしまっている。忘れていなくても、忘れようとしています。自分はいきなり大人になったような顔をして、子どもにやたらと要求する。しかも、ものすごくせっかちに要求する。今日種を植えたら、明日花を咲かせなければいけないような要求の仕方をする。

子どもの方はたまったものではありません。だからそれなりの時間を子どもに与えてやらなければ、子どもは息が詰まる。子どもが荒れるというのは、息苦しくてどうしようもなくなって、一気にガーッと息をついているような状態だと思うんです。

それと話があちこちになりますが、私たち大人が子どもとの関係においてさらに良くないのは、子どもを信用していないことです。今の子どもは悪い、言うことをきかない、常識がない、だから子どもたちだけで何かをやらせるのは危険だ、大人が指図をしなければ子ども達はまともな行動ができない、我々大人はそう思ったがる。そう思うことで、大人としてのけちな自負心を満たしているようなところがあるんです。

ところが子どもというのは、放ったらかしておいてもちゃんとやります。ただ、大人が考えるよりは時間がかかる。

僕は、教育というのはひたすら待つことだと思っています。待つこと。信じて待つことです。そういう覚悟を決めて我慢をすることです。子どもはそんなに捨てたもんじゃない。なぜなら、皆さんがお作りになった子どもです。その子どもを信じないでどうします。私は子どもがないから実にうらやましい気がする。どうか皆さん、子どもを信じてやってください。

時間が参りました。何だか偉そうなことを喋りました。おそらく大変お耳触りな点も数々あったかと思えます。お許してください。どうもありがとうございました。